環境配慮行動の観察しやすさと平均以上効果

○大久保暢俊¹・下田俊介²

(¹ 東洋大学エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ・² 東洋大学人間科学総合研究所)

キーワード：環境配慮行動，平均以上効果，社会的比較

The better-than-average effect and the ease of observation of environment-conscious behavior

Nbutoshi OKUBO¹ and Shunsuke SHIMODA²

(¹Transdisciplinary Initiative for Eco-Philosophy, Toyo Univ., ²Institute of Human Sciences, Toyo Univ.)

Key Words: environment-conscious behavior, better-than-average effect, social comparison

目 的

本研究の目的は、他者が行っているのを観察しやすい環境配慮行動と、観察しづらい環境配慮行動で平均以上効果の現出が異なることを実証することにある。

平均以上効果のメカニズムの説明には、認知過程を重視する立場と、動機づけを重視する立場とがある。認知過程を重視する立場の Kruger, et al. (2008) は、平均他者情報による調整が不十分で自己情報に過度の重みづけがなされていることが平均以上効果のメカニズムであると主張した。それに対し、Alicke & Govorun (2005) は、自己高揚の動機づけを含むモデルによる説明を行った。本研究は、認知過程と動機づけの双方を内包する社会的比較のプロセスを仮定した平均以上効果研究に基づき (Guenther & Alicke, 2010: 大久保・下田, 2012)、自己評価と平均他者評価の情報の使われ方が他者行動の観察しやすさで異なるとの仮説を導いた。

環境配慮行動は、まだ行っていない行動や、馴染みのない行動である場合も多い。そのような行動は過去の遂行結果といった自己情報の絶対量が少ない。そのため、環境配慮行動の中でも、他者が行っているのをよく見かける行動と、そうでない行動で平均以上効果の現出パターンは変わる。具体的には、他者が行っているのをよく見かける行動では、自己情報への過度の重みづけと、他者の存在を前提とした社会的比較のプロセスが競合することになる。したがって、相対自己評価は、自己評価だけでなく、平均他者評価とも関連するであろう。それに対し、他者が行っているのを見かけない環境配慮行動は、他者情報がそもそも利用できないことから、自己情報に注目せざるを得ない。したがって、他者が行っているのを見かけない行動では、自己評価との関連だけが観察されるであろう。

自己に馴染みのない行動では、自己についての判断は環境要因の影響を受けやすくなる (Festinger, 1954)。したがって、他者の行動をよく見かけるか、または見かけないかは自己情報に影響を与える。たとえば、多くの人が行っている行動は自分にも可能であろうし、行っている人がいなければ自分にも不可能だと判断するであろう。すなわち、環境配慮行動の文脈では、他者の行動を見かける程度と自己が行動する際の実行の困難度が関連し、その情報が自己情報として利用されるであろう。したがって、他者が行っているのをよく見かける環境配慮行動は自分でも可能であると判断し、自己情報への過度の重みづけという認知メカニズムにより平均以上効果が現出するのに対し、他者が行っているのを見かけない環境配慮行動では平均以下効果が現出するであろう。

さらに、本研究では、自尊感情と各評価の関連を検討することで、認知過程の中でどのように動機づけ要素が関連するのかを併せて検討した。

方 法

調査参加者：四年制大学の学生 155 名。

手続き：事前に検討された、他者が行っているのを「よく見かける環境配慮行動」、「見かけない環境配慮行動」のそれぞれ 5 項目について、“あなたはどのくらい実行できると思うか（自己評価）”，“同年齢、同性の平均的な大学生はどのくらい実行できると思うか（平均他者評価）”，“同年齢、同性の平均的な大学生に比べてあなたはどのくらい実行できると思うか（相対自己評価）”の 3 パターンの質問に回答してもらった。自己評価、平均他者評価では、“かなり実行できる”から“まったく実行できない”とラベルづけされた 7 件法であった。相対自己評価では、“平均的な大学生より実行できる”から“平均的な大学生より実行できない”とラベルづけされており、中央は“平均的な大学生と同じ”とラベルづけされた 7 件法であった。自己評価、平均他者評価、相対自己評価の順序、および項目内の順序はカウンターバランスをとった。最後に Rosenberg の自尊感情尺度 (山本・松井・山成, 1982) に回答してもらった (5 件法)。

結 果 と 考 察

平均以上効果：よく見かける環境配慮行動、および見かけない環境配慮行動ごとで中央値 (4：平均的な大学生と同じ) を 0 とする *t* 検定を行った。その結果、よく見かける環境配慮行動で平均以上効果 ($M=5.19, SD=0.97, t(148)=15.09, p<.01$)、見かけない環境配慮行動で平均以下効果 ($M=3.37, SD=1.02, t(148)=7.50, p<.01$) が確認された。

相対自己評価と自己評価、平均他者評価の関係：相対自己評価を目的変数、自己評価と平均他者評価を説明変数とする重回帰分析を行った。その結果、よく見かける環境配慮行動では重回帰式が有意であり ($R^2_{adj}=.49, F(2, 146)=73.06, p<.01$)、自己評価の正の影響 ($\beta=.76, t=11.84, p<.01$)、および平均他者評価の負の影響がみられた ($\beta=-.18, t=2.73, p<.01$)。見かけない環境配慮行動でも重回帰式は有意であった ($R^2_{adj}=.39, F(2, 146)=48.84, p<.01$)。しかし、よく見かける環境配慮行動とは異なり、自己評価で正の影響は確認されたが ($\beta=.61, t=8.10, p<.01$)、平均他者評価では影響が確認できなかった ($\beta=.05, t=0.63, ns$)。

自尊感情との関係：自尊感情、自己評価、相対自己評価の間で相関、偏相関分析を行ったところ、見かけない環境配慮行動で自尊感情と相対自己評価に正の関連が確認された。

Figure 1. 自尊感情、自己評価、相対自己評価の相関関係。パス間の値は相関係数。括弧内は第三変数を統制した値。* $p<.05$, ** $p<.01$